

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別授受承認第甲二七号  
明治三十一年十月十日第三種郵便物認可(毎月一回)百五十七  
平成二十年二月一日発行(第百一十一巻第二号)

# ホトトギス

二月号



## 俳句随想 〔三二八〕

汀子

一月号に新しくホトトギス同人に推薦する方々のお名前を發表した。

ここでホトトギス同人について少し考えてみたい。曾て虚子は次のように書いた。

ホトトギス同人といふのは、【一】有数なる作家にして熱心なるホトトギス支持者。【二】古き俳人にして熱心なるホトトギス支持者。【三】一度選者たりし人、又は古き縁故ある人にて、今は疎遠となり居るも、別にホトトギスに離反する意思表示なき人。

以上であるが、私はこれに更に一項目を加えたいと思っている。曰く、【四】若い人であつてもホトトギスをよく理解し、将来ホトトギスを支えてくれると期待される人。

「ホトトギス同人には権利も義務もない」という言葉も虚子以来一貫している。しかしこれは主として経済的な負担について言っているのである。しかしその精神に於ては、ホトトギス同人になつた瞬間から花鳥諷詠を理解し立派な作品を作り、ホトトギスに対する論難に立ち向かう覚悟が要請されているのである。

旬日記

汀子

平成十九年二月三日 芦屋ホトギス会

油断してならぬ二月の陽気かな

臘梅の香りの届く席に着く

集ひたることもつとも春隣

二月四日 関西野分会

ポパイにもなれず蒨葎草食べて

針供養少女の夢の限りなく

人送り出て立春の風と会ふ

二月四日 下萌旬会

水浴びに来てゐる鳥に薄氷

野火くぐり立つ鳥の影ありにけり

勢子のかげ走り野焼の火の行方

二月五日 ロイヤル俳壇

寒明といふ目に見えぬ安堵あり

薄氷を踏み張り替へし芝を避け

室咲のカトレア飾り客を待つ

週末に待つ会寒も明けしこと

よべ星の美しき朝の薄氷

二月八日 清交社

露の薔長けしも摘みておしことを

福豆と鬼の面を渡さるる

東京の客も加はる節分会

お江戸より運ばれて来し福の豆

穴釣は禁止公魚舟出でし

一日に追はれてをりぬ節分会

二月九日 悼 近藤様

芦屋川桜まつりに君在さず  
二月九日 工業倶楽部

早春の光の中に癒やさるる

早春の富士まだ脱がぬ雪衣

早春といふ約束のやうなもの

二月十二日 深新会

春寒き庭より戻り来し無口

春らしき光の中に集ふ会

うららかや四半世紀を祝ふ会

この会も二十五年目露の薔

二月十三日 大阪倶楽部

春寒や空の明るさありながら

明るさに惑はされたる春寒し

そのつもりして春寒を寄せつけず

春菊を茹でし厨と分りけり

朝月の細く傾き春浅し

早春の心満ちたる会となる

二月十三日 綿葉倶楽部

梅二月紅白に日の行き渡り

雪解の岳麓に旅予定組む

会いくつ過ぎ紅梅の咲き増ゆる

白梅の咲けば待ちあゝる旅予定

二月十九日 アサヒカルチャー

梅が香を運び落花をさそふ風

教室は五階に移る春の風

春光の十三階も名残かな

二月二十日 有恒クラブ

山焼の勢子現はれてはじめけり

春の風邪それがきつかけとも思ふ

梅が香に別れ道あり返しけり  
梅二月雨の東京発ちて来し

上京の日々紅梅の待つ家路

百人の一人はつきり春の風邪

二月二十日 無名会

踏んでおし大地の力いぬふぐり

焼野あり中に抜けゆく径のあり

星の縞羅睡つてをりしいぬふぐり

開発の進んでをりぬいぬふぐり

さつきまで修羅場でありし焼野かな

はや萌ゆるものを蔵して焼野かな

二月二十一日 夏潮旬会

紅梅の濃淡香り濃淡に

注意書読みて紅梅より返す

落椿踏み養生の芝踏まず

養生の芝踏みさうや落椿

張りかへし芝に待たるる春時雨

京の晴信じられざる春時雨

二月二十一日 きんぎょ会

旅になほ余寒に備へ置くものも

魁けし虚子の記念日春めける

二月二十三日 時雨会

張りかへし芝にこぼれて濃紅梅

湖の風まだ固し義仲忌

雨止みしばかりに月の梅となる

間に合ひし夕日に梅の雨上る

二月二十五日 野分会

冴返る朝の光の溢れけり

好き嫌ひ有無を言はせず蒨葎草

# 廣太郎句帳

廣太郎

平成十九年一月一日 蕉心会

蕉像も碧梧桐忌の目差に  
昨日火事ありて新丸ビルの黙  
雪焼の顔に過去持つ女かな  
春近し猫がのたうちまはるほど  
春隣芭蕉と同じ年の僕  
虚子門に碧梧桐忌といふ奇縁  
挨拶は雪降つて良かつたです  
吾が噓川向うまで餅して  
二月二日 一水会  
室の花贈り君とは今日限り  
二月三日 虚子館投句  
庭といふ館の歲月春立てり  
二月四日 浜松市民オーケストラ鑑賞  
トランペットいよよ妖しき春灯下  
猫の恋めくヴィオロンの調べかな

オルガンの輝きに春立ちにけり

二月五日 はせを句会

一人二人三人二月礼者かな  
春寒き決断をせし手紙かな  
女正月虚子六人の娘かな

二月八日 土筆会

揺れ合うて若布は水と対話せり  
鎌倉に怪しき静寂実朝忌  
目の合へばどうして逃げるうかれ猫

二月十日 吉村ひさ志氏一周忌

一と年といふ俳を梅に寄す  
御披露目はこの春灯の下でこそ

二月十五日 登高会

猫柳より俳磚の風となる  
猫柳河川敷とは犬の庭  
天辺に風遊ばせて猫柳

薄氷の大地に還りゆく仔細

早春や男児誕生知らず文

薄氷に芦屋マダムの靴の先

二月二十日 草木瓜会

針納して主婦の顔とり戻す  
見上げたる先に大富士野火煙

野を焼いて還りゆくもの生るもの

二月二十四二十五日 若水句会吟行会

冴返る風に鳶の輪描けざる  
一本のマストの先の余寒かな  
春の海水平線といふ奈落

水温む波音といふコンチエルト

春寒き歩幅海岸線を行く

恋猫の声低く鳶笛高く

春風や未来都市めく丘の上

残雪の富士対岸のあの辺り

強東風に富士全容を明かし初む

朝日出づ残雪の富士染め上げて

二月二十六日 朝日カルチャー若草句会

猫柳今宵は銀座明日芦屋  
君の過去流せし川や猫柳  
川幅に風の囁き猫柳

二月二十八日 目黒学園句会

薄氷を踏んで朝日を誘へり

絵踏して裔は司祭といふ家系

飾られし踏絵の叫びありにけり

父の星薄氷育てをりにけり

薄氷となりゆくは日の恵みかな



# 雑詠句評（二月号より）

むつみ・中 正・眞理子  
とほ歩・保 佳・千鶴子  
静 龍・憲 明・芳 子  
葉 ・美 奇・廣太郎

披かれし句碑を見守る露の荘 神戸 千原叡子

八月野分会の夏行で、稲畑汀子先生と廣太郎先生の句碑が稲畑家の六甲の山荘の入口に建てられた。その時の親子句碑であろう。

山荘の霧深き夜は音なき夜 汀子  
父も又早世の人癩祭忌 廣太郎

山荘での日々が彷彿として甦るのは稲畑家ご家族のみならず、昔から様々の思い出を共有された作者にとつても同じである。募り来るその心が「句碑を見守る露の荘」の措辞に至ったのである。親子句碑建立を称え、そしてその奥にある亡き稲畑純三氏を偲び、

祈りの心が滲む。淡々と写生している中に「露の荘」に託した五文字が語る心情は計りしれず深い。（むつみ）

手前味噌ではあるが、平成十九年八月に、汀子主宰と筆者の親子句碑が、兵庫県六甲山上の、稲畑家山荘の前に、お馴染み「野分会」の御尽力により建立された。作者もその句碑を御覧になったのである。稲畑家にとつても思い出のあるこの山荘へのしみじみとした存問なのである。（廣太郎）

汚点なく濁点もなく吾亦紅 八尾 岩垣子鹿

吾亦紅は、いうまでもなく可憐で純粹な花。やや地味で目立たないが、花野の精のようにひそやかに咲く。吾亦紅がもつこの高い精神性を、「汚点なく濁点もなく」と的確に表現した句である。「なく」をくり返したことでさらに純粹さを強調するなど、全体としてみ。ことに知的に処理された一句だが、そのことによつて、吾亦紅とそれがもつ一帯の山気や青空などの秋らしい詩情は損なわれてはいない。（中正）

ユニークな花の形で知られる「吾亦紅」の花は、名前からしてユニークなのではないだろうか。虚子にもこれをユニークに詠んだ名句があり、この花の形を的確に詠んでいるが、ここに又季節をうまく捉えた句が誕生した。この花の咲いている広い花野の拡がりも想像出来る。（廣太郎）

# 天地有情

# 子選

ボケットに子等の夢あり赤のまま  
句碑生れてより里山の初秋に  
被災地に悼むや露の崩落地  
被災地の花野ととのひつつありし  
水澄みて石のこころも澄みゆける  
一途さを空に残して鳥渡る  
ただ一途諷詠の道露の世に  
夕焼の龍野に老いて悔あらず  
次子長子喪ひ夏も逝かんとす  
此の暑き此の醜悪の文明よ  
茫々の梅雨雲に居る山の莊  
荒梅雨を郵便車来る山の莊  
一族の墓の大小露けしや  
傾きて風には揺れぬ吾亦紅  
もう踊ることはなからん踊見る  
阿波踊 心の中の幾故人  
萩の風芒の風となりにけり  
いつ来てもどこかに風のあり花野

東京 稲畑廣太郎  
同  
長岡 安原 葉  
同  
神戸 長山あや  
同  
たつの 浅井青陽子  
同  
豊中 瀧 青佳  
同  
箕面 井上浩一郎  
同  
東京 今井千鶴子  
同  
徳島 上崎暮潮  
同  
熱海 嶋田 一步  
同

風神の踏み倒したる稲ならん  
蛇見しと団扇を宙にをどらして  
雪吊の一本柱立てしーより  
雪吊の縄の加減をと見かう見  
蔵構へ残る船場の秋暑し  
適塾の高き階 秋 暑し  
残すべき父の書徴を拭ひては  
二階部屋の熱気抜けざる残暑かな  
夜学子のたぢろぐ京の寺の数  
穂に出でし芒しとどに濡れてをり  
吾のみに使ふ夜長のうれしさよ  
灯台の白を花野の果とせる  
草といふものにもつとも残暑かな  
ついと水引は言問ふ色に出づ  
合歡の花 夢幻と言ふ勿れ  
苔もまた薄紅葉してをりしこと  
看取り終ふ芒穂にいでをりしとは  
秋水に白鷺の立つ静けさに同

福山 竹下陶子  
同  
福岡 松尾緑富  
同  
吹田 宮崎 正  
同  
同 大橋 暁  
同  
榎原 稲岡 長  
同  
神戸 山田弘子  
同  
熊本 岩岡中正  
同  
明石 中杉隆世  
同  
東大阪 東野太美子  
同

# 天地有情句評

汀子

ただ一途諷詠の道露の世に たつの 浅井青陽子

はかない世であるを知つていても貫く一筋の道。

次子長子喪ひ夏も逝かんとす 豊中 瀧 青佳

逆縁の哀しみの夏も過ぎ行くが哀しみは去らず。

茫々の梅雨雲に居る山の荘 箕面 井上浩一郎

山荘を去らぬ梅雨雲を見ている作者の感慨。

一族の墓の大小露けしや 東京 今井千鶴子

一族の墓地を訪ね色々な思いを抱く作者の逡巡。

もう踊ることはなからん踊見る 徳島 上崎暮潮

阿波踊の名手の晩年の淋しさ。

俳人と自然の存間。

句碑生れてより里山の初秋に 東京 稲畑廣太郎

被災地に悼むや露の崩落地 長岡 安原 葉

天災の傷跡の露けさ。

水澄みて石のころも澄みゆける 神戸 長山あや

水が澄む秋が作る自然の心。